

高等学校 特別支援教育

全日制高等学校地理歴史科（日本史B）における授業のユニバーサルデザイン化が
学習意欲や学習理解に及ぼす効果

青森県立大湊高等学校 教諭 井上 八城

要 旨

定時制・通信制高等学校において効果が実証されている授業のユニバーサルデザイン化を全日制高等学校の四年制大学進学希望者へ実施し、その効果を検証した。導入した手立ては、①目標の明示、②時間の構造化、③板書事項の規則化、④教室環境の整備、⑤協調学習であった。多くの生徒の学習成績が上昇し、学習意欲が向上したことから、授業のユニバーサルデザイン化は、全日制高等学校地理歴史科（日本史B）において有効であることが示唆された。

キーワード：授業のユニバーサルデザイン化 全日制高等学校 地理歴史科 進学指導

I 主題設定の理由

小・中学校では、学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒が約6.5%在籍し（文部科学省，2012，以下，文科省），全日制高等学校では、発達障害が疑われる生徒が普通科で2%，総合学科で3.6%が在籍することが報告されている（文科省，2009）。しかし，文科省（2013）から，特別支援学校や定時制・通信制高等学校以外では，教員の発達障害に対する意識や具体的な支援，体制整備は十分とは言えない状況が読みとれる。日野・熊谷（2014）が行った特別支援教育コーディネーターへの調査においても，進学指導に重点が置かれている学力重点校とそれ以外の高等学校とでは，発達障害の疑われる生徒への配慮に大きな違いがあることが指摘されている。加えて，吉利（2014）は，学力重点校では教員のインクルーシブ教育に対する取組や生徒の自己効力感が低いことを述べている。また，成績上位校・学力重点校ほど教師主導の講義形式の授業が多く，生徒が意見発表する場面や問題解決する活動は重視されていない傾向が強いことが報告されている（国立教育政策研究所，2013，ベネッセ教育総合研究所，2013）。発達障害を有する生徒は，周囲の理解不足により学校不適応や学力低下等を起こすことがあり，その対応が重要である。筆者は複数の全日制高等学校において特別な支援を必要とする生徒の指導に携わる中で，カウンセリング技法の活用や生徒がわかったと実感できる特別支援教育の視点に立った授業展開が問題行動の予防と減少につながることを報告しているが（井上，2014），学力低下の改善までには至っていない。

ベネッセコーポレーション（2015）によると，受験者数の増減などがあり単純比較はできないが，全日制高等学校の就職希望及び進学希望者が併存する総合学科などの進路多様校では，大学入試模擬試験（以下，模試）の成績は受験日が近づくにつれて下降傾向を示すことが報告されている。また，成績のみならず，授業以外の自主的な学習時間も少なく，学年が上がるにつれ減少傾向にあることが報告されている（ベネッセ教育総合研究所，2015）。

以上により，全日制高等学校における生徒の学習意欲や学習理解の向上を図るため，授業のユニバーサルデザイン（以下，UD）化による効果を検証することにした。

II 研究目的

全日制高等学校に在籍する生徒に対し，UD化した授業を展開し，その効果を検証する。

III 研究仮説

UD化した授業を展開することにより，進路希望の違いに関わらず，生徒の学習意欲や学習理解が向上するのではないかと。

IV 研究の実際とその考察

1 研究Ⅰ UDに関する事前調査

(1) 目的

UD化にあたり、生徒からの授業評価を踏まえた授業の改善点、導入する手立てを検討する。また、教員のUDに対する意識や認知度、実施状況等を把握する。

(2) 調査Ⅰ 生徒へのアンケート（「わかる授業」展開のための授業評価）

ア 調査方法

青森県総合学校教育センターの「今日からできる「わかる」授業～実は大切！こんなところ！！「授業のチェックポイント」～」を参考に、質問紙を作成し調査した。質問は12項目から成り、各質問とも5件法（5．そう思う，4．まあそう思う，3．どちらともいえない，2．あまりそう思わない，1．そう思わない）をとった。質問事項は表1に示した。また、各質問項目には、判断した理由や原因を書く記述欄を設けた。

表1 質問事項（「わかる授業」展開のための授業評価）

担当科目の先生の授業について	質問1	自分（生徒）の特性や能力を理解して授業をしている。
	〃 2	生徒の理解度に合わせて、教える内容を整理している。
	〃 3	生徒の理解度に合わせて、教え方を工夫している。
	〃 4	いつまでに何をすればよいか、終わったら何をすればよいか、指示を出している。
	〃 5	その時間や単元で何を行うのか、何が目的なのかをわかりやすく説明している。
	〃 6	板書の文字、色、配置などを工夫している。
	〃 7	板書する際に、板書のルールを説明している。
	〃 8	文字だけでなく、絵、図、写真などを提示している。
	〃 9	Yes-Noの回答だけでなく、なぜそうなるのか考え、発表する機会がある。
	〃 10	生徒同士で意見を交換する機会がある。
教室環境について	〃 11	黒板まわりは、掲示物や授業に関係ない連絡事項などがない。
	〃 12	黒板はきれいな状態で授業が開始されている。

イ 調査対象

研究協力校A校（総合学科）（以下、A校） 日本史B選択生徒99名（3年生36名 2年生63名）

ウ 分析方法

各学年「四年制大学・短期大学進学希望者」と「専門学校・就職希望者」の2群の計4群（以下、3年進学群，3年就職群，2年進学群，2年就職群）に分類し、単純集計後、学年や進路希望別に授業評価を分析した。

エ 結果

回収率は100%であった。集計結果は表2に示した。多くの項目（48項目中35項目）が4.00以上だったが、質問1（特性・能力の理解）で4群中2群に、質問9（発表する機会）、質問10（意見交換の機会）、質問11（黒板まわり）では3群以上に4.00未満の項目があった。群間による一元配置の分散分析を行ったところ、質問6（板書の工夫）で有意な差が認められ（ $F(3,95)=3.25$ ， $p<.05$ ），Bonferroni法による多重比較の結果、3年就職群及び2年進学群が2年就職群より高かった。その他の項目では、進路希望や学年別による有意差はなかった。自由記述（問、あなたにとって分かりやすいと感じる授業はどんな授業ですか）の回答は、4群に共通する内容として、「丁寧な説明」、「対話のある授業」、「見やすい板書」、「実物教材（資料）の提示」、などがあつた。

表2 授業評価（事前調査）の分散分析結果

質問	3年進学群 (n=15)		3年就職群 (n=21)		2年進学群 (n=29)		2年就職群 (n=34)		F 値
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	
1	4.13	(0.72)	3.90	(0.81)	4.07	(0.64)	3.74	(0.74)	1.50
2	4.27	(0.85)	4.10	(0.81)	4.17	(0.75)	4.09	(0.61)	0.24
3	4.33	(0.87)	4.43	(0.66)	4.21	(0.71)	4.15	(0.65)	0.76
4	4.27	(0.85)	4.67	(0.47)	4.31	(0.70)	4.44	(0.69)	1.37
5	4.47	(0.62)	4.67	(0.47)	4.55	(0.77)	4.35	(0.68)	1.03
6	4.80	(0.40)	4.90	(0.29)	4.90	(0.30)	4.53	(0.78)	3.25*
7	4.67	(0.60)	4.81	(0.39)	4.86	(0.34)	4.74	(0.50)	0.73
8	4.27	(0.93)	4.57	(0.49)	4.14	(0.94)	4.21	(0.93)	1.11
9	3.87	(0.81)	3.52	(1.05)	3.76	(1.04)	3.88	(0.87)	0.65
10	3.47	(0.96)	3.19	(0.96)	3.62	(1.00)	3.91	(1.07)	2.24†
11	3.87	(0.88)	4.05	(1.17)	3.93	(1.36)	3.53	(1.31)	0.90
12	4.00	(0.89)	4.52	(0.73)	4.59	(0.62)	4.21	(0.93)	2.38†

*: $p < .05$, †: $p < .10$.

(3) 調査Ⅱ 教員へのアンケート（授業のUD化に関する調査）

ア 調査方法

筆者作成の質問紙により調査した。質問は10項目から成り、各質問とも5件法（研究Ⅰの(2)調査Ⅰと同じ）をとった。また、各質問項目には、判断した理由や原因を書く記述欄を設けた。

イ 調査対象

A校 教員 47名

ウ 分析方法

単純集計の後、年齢層を2群（40代以上と40代未満）に分類し、群間における意識の差を分析した。

エ 結果

回収率は83%であった。集計結果を表3に示した。t検定を行ったところ質問3と質問7で有意差があり ($t(30)=2.22, p < .05, t(37)=2.81, p < .01$), 40代以上が40代未満よりも高かった。その他は年齢による有意差はなかった。自由記述では、「活用できるか分からない」、「進学指導には不向き」などUD化への不安や抵抗を示すものの他、「プリント整理が困難な生徒もいるため、サイズを統一している」、「見にくい色のチョークは使わない」、「授業の目標をはっきりと伝えている」など、UD化の視点をすでに取り入れているものもあった。

表3 教員の意識調査のt検定結果

質問項目	計	40代以上	40代未満	t 値
	n=39	n=11	n=28	
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	
1 現在の勤務校において発達障害が疑われる生徒が在籍している。	3.95 (1.21)	3.91 (1.14)	3.96 (1.26)	0.13
2 これまでの勤務校で、発達障害が疑われる生徒が在籍していた。	3.94 (1.45)	4.30 (1.25)	3.80 (1.53)	0.92
3 発達障害が疑われる生徒に学校もしくは自分は適切な指導を行っている。	3.38 (0.87)	3.89 (1.05)	3.17 (0.72)	2.22*
4 発達障害が疑われる生徒に対し、何らかの特別な配慮が必要だと思う。	4.28 (0.72)	4.64 (0.67)	4.14 (0.71)	1.99†
5 発達障害が疑われる生徒と一般の生徒は同じ環境で高校生活（学習活動等）をおくことができると思う	3.79 (1.03)	4.00 (1.00)	3.71 (1.05)	0.78
6 今後、全日制高等学校において、発達障害が疑われる生徒の人数（割合）は増えると思う。	3.97 (1.06)	4.18 (0.87)	3.89 (1.13)	0.76
7 「インクルーシブ教育システム」を知っている。	2.36 (1.25)	3.18 (1.08)	2.04 (1.17)	2.81**
8 「授業のユニバーサルデザイン」を知っている。	2.56 (1.35)	3.00 (1.18)	2.39 (1.40)	1.27
9 「授業のユニバーサルデザイン」を活用した授業を現在行っている。	1.85 (0.99)	2.18 (1.17)	1.71 (0.90)	1.34
10 「授業のユニバーサルデザイン」を担当授業でも活用していきたい。	3.59 (0.97)	4.00 (1.26)	3.43 (0.79)	1.70†

質問3は、質問1もしくは2で、「評価5」もしくは「4」回答者対象（40代以上 n=9 40代未満 n=23 計 n=32）

**: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$.

(4) 考察

調査Ⅰより、2年就職群において、板書の工夫（質問6）の評価が有意に低かったため、伝え方の改善や生徒が理解しやすいような工夫が必要である。評価が比較的低い、意見発表の機会（質問9）、言語活動（質問10）、黒板まわり（質問11）と合わせて、UD化における重点項目とした。

調査Ⅱより、文科省から「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」が出された2003年を特別支援教育の転換期と捉え、その前後の教員経験の有無がインクルーシブ教育システムやUDの認知に影響があると仮定していたが、UDの認知度、発達障害が疑われる生徒への指導経験（質問3）において40代以上に高い結果となった他は有意な差は無く、多くの教員が発達障害の疑われる生徒の在籍を認知し今後も増えていくと考えている反面、インクルーシブ教育システムやUDについての認知度が極めて低く、有効な手立ては取られていないことが分かった。

以上の結果を踏まえ、研究ⅡではUD化した授業の効果を検証した。実施する手立ては、青山・川角ら（2010）や千葉県立船橋法典高等学校（2011）、山形県教育センター（2013）などの先行研究を参考に選定した。その上で、視覚化、焦点化、共有化を軸に、教員の負担が比較的少ないものに限定し、①目標の明示、②時間の構造化、③板書事項の規則化、④教室環境の整備、⑤協調学習の5項目とした。段階的な導入は除き、全ての項目による指導期間は2015年8月下旬～11月下旬の3か月間とした。それぞれの具体的な実施内容は表4に示した。

表4 UD化の実施項目

手立て	具体的な実施内容
①目標の明示	・単元の最初に単元目標についてグループごとに話し合い、発表する。（⑤と連動） ・発表後、流れ・キーワード・項目を掲示した上で、概要を説明する（川嶋（2013）が提唱する「KP法」を用い、キーワードは単元終了まで常に提示する）。
②時間の構造化	・前記①と合わせ、小単元・項目ごとの予定授業時間数を知らせる。 ・協調学習などでは、予定時間を板書し、経過とともに残り時間を知らせる。
③板書事項の規則化	・チョークの色を重要事項（黄色）、年代・年号（緑）、人物（赤）に分ける。 ・項目区分、記号の統一（①②③…（1）（2）…（a）（b）…、* = 補足、◎ = まとめ 他） ・用語（漢字）に平仮名のルビを付す。（ン、ソ、ツ、シ、ニなどの片仮名にも） ・上記内容は口頭のみではなくレジュメにして配付する。
④教室環境の整備	・授業に不必要な掲示物の撤去。 ・授業開始時に机間巡視をし、机に不必要な物や落書きなどが無いように指示する。 ・開始・終了時の挨拶後の着席指示（個々に着席・解散しない）。
⑤協調学習	・単元の最初：単元目標について意見交換し、グループでまとめた意見を発表する。 ・単元の最後：ノートにまとめた内容を説明しあい、不備事項を確認する。 ・言葉遣いや話す際の日線など、ソーシャルスキルトレーニングの視点を取り入れた指導も行う。

2 研究Ⅱ UD化した授業の効果の検証

(1) 目的

UD化による生徒の意識や模試の成績への効果を検証する。

(2) 調査対象

ア アンケート調査

A校 日本史B選択生徒99名（3年生36名 2年生63名）

イ 成績調査

日本史Bが受験科目に加わる2年生11月から3年生11月までの全ての模試（計8回）を受験した3年生5名を対象とした。

(3) 研究方法

ア 調査Ⅰ 生徒へのアンケート1 「わかる授業」展開のための授業評価

UD化した授業の前後評価を比較するため研究Ⅰ-(2)調査Ⅰで用いた質問紙により調査した。

イ 調査Ⅱ 生徒へのアンケート2 UD化実施項目の評価と自己変化について

事後調査として、5つの手立てと総合的な評価の計6項目について、1. 担当教員の実施状況、2.

「わかる授業」展開への必要性， 3. 「学習意欲」の高まり， 4. 「知識・理解」の深まり， 5. 「成績」上昇， 6. 「授業以外の学習時間」の増加， の計36項目からなる筆者作成の質問用紙によりUD化の影響を調査した。各質問とも5件法（5. そう思う， 4. まあそう思う， 3. どちらともいえない， 2. あまりそう思わない， 1. そう思わない）をとった。

ウ 調査Ⅲ 成績の推移

今年度の生徒（実験群， $n=5$ ）と前年度の生徒（統制群， $n=12$ ）の2年生11月から3年生11月までの模試（計8回）の全国偏差値の推移を比較した。また，成績傾向の参考として5教科総合も比較した。

(4) 分析方法

ア 調査Ⅰ 生徒へのアンケート1 「わかる授業」展開のための授業評価

単純集計後，研究Ⅰ－(2)と同様に4群に分類し，UD化前後の評価を分析した。

イ 調査Ⅱ 生徒へのアンケート2 UD化実施項目の評価と自己変化について

単純集計後，UD化の効果を分析した。

ウ 調査Ⅲ 成績の推移

成績は，模試の全国偏差値の群内比較を行った。各群それぞれが受験した全試験の平均値（100%を基準値とする）と各試験結果との比較による成績率を分析した。

(5) 結果

ア 調査Ⅰ 生徒へのアンケート1 「わかる授業」展開のための授業評価

回収率は100%であった。授業評価の推移について表5に示した。年度途中で2年生に進路希望に変更があった（進学群4名増，就職群4名減）が，群間による一元配置の分散分析の結果，4群間で有意差はなかった。実施前後の評価の変化について，3年進学群では全ての項目が上昇もしくは維持した。他群においてもUD化にあたり重点項目とした「意見発表の機会」（質問9），「言語活動」（質問10）の評価が上昇した。 t 検定の結果，有意差があったものは，「意見発表の機会」では，3年就職群（ $t(40)=3.10, p<.01$ ），2年進学群（ $t(60)=2.69, p<.01$ ），2年就職群（ $t(62)=2.18, p<.05$ ），「言語活動」では，3年進学群（ $t(28)=4.50, p<.001$ ），3年就職群（ $t(40)=6.71, p<.001$ ），2年進学群（ $t(60)=5.33, p<.001$ ），2年就職群（ $t(62)=2.85, p<.01$ ），「黒板まわり」（質問11）では，2年就職群（ $t(62)=2.33, p<.05$ ）であった。なお，同じく重点項目とした「黒板まわり」（質問11）における3年就職群など実施後の評価が減少している項目については全て実施前との有意差はなかった。

表5 UD化前後の授業評価（ t 検定と群間の分散分析結果）

質問	3年進学群 (n=15)				3年就職群 (n=21)				2年進学群 (n=33)				2年就職群 (n=30)				F値
	Mean	(SD)	実施前 (M)との差	t値	Mean	(SD)	実施前 (M)との差	t値	Mean	(SD)	実施前 (M)との差	t値	Mean	(SD)	実施前 (M)との差	t値	
1	4.27	(0.77)	△ 0.13	0.47	3.95	(0.79)	△ 0.05	0.19	4.27	(0.62)	△ 0.20	1.26	4.00	(0.63)	△ 0.26	1.50	1.44
2	4.47	(0.62)	△ 0.20	0.71	4.24	(0.61)	△ 0.14	0.63	4.21	(0.59)	△ 0.04	0.23	4.17	(0.64)	△ 0.08	0.49	0.81
3	4.40	(0.71)	△ 0.07	0.22	4.33	(0.64)	▼ 0.10	0.46	4.27	(0.62)	△ 0.07	0.38	4.27	(0.73)	△ 0.12	0.68	0.16
4	4.73	(0.44)	△ 0.47	1.82 †	4.52	(0.66)	▼ 0.14	0.79	4.55	(0.61)	△ 0.24	1.39	4.47	(0.67)	△ 0.03	0.15	0.61
5	4.73	(0.44)	△ 0.27	1.31	4.76	(0.43)	△ 0.10	0.67	4.58	(0.60)	△ 0.02	0.04	4.47	(0.81)	△ 0.11	0.60	1.13
6	4.87	(0.34)	△ 0.07	0.48	4.76	(0.53)	▼ 0.14	1.06	4.73	(0.45)	▼ 0.17	1.70 †	4.70	(0.53)	△ 0.17	1.00	0.42
7	4.67	(0.47)	0.00	0.00	4.71	(0.55)	▼ 0.10	0.63	4.61	(0.60)	▼ 0.26	1.99 †	4.77	(0.50)	△ 0.03	0.25	0.47
8	4.27	(0.77)	0.00	0.00	4.24	(0.81)	▼ 0.33	1.57	4.09	(0.96)	▼ 0.05	0.19	4.13	(0.85)	▼ 0.07	0.32	0.20
9	4.47	(0.88)	△ 0.60	1.88 †	4.38	(0.65)	△ 0.86	3.10 **	4.36	(0.69)	△ 0.61	2.69 **	4.33	(0.75)	△ 0.45	2.18 *	0.11
10	4.73	(0.44)	△ 1.27	4.50 ***	4.76	(0.43)	△ 1.57	6.71 ***	4.70	(0.52)	△ 1.08	5.33 ***	4.57	(0.67)	△ 0.65	2.85 **	0.63
11	4.00	(1.32)	△ 0.13	0.31	3.86	(0.94)	▼ 0.19	0.57	4.39	(0.78)	△ 0.46	1.64	4.17	(0.86)	△ 0.64	2.23 *	1.50
12	4.07	(0.93)	△ 0.07	0.19	4.14	(0.99)	▼ 0.38	1.38	4.55	(0.61)	▼ 0.04	0.26	4.43	(0.72)	△ 0.23	1.07	1.85

実施前 (M)との差について，△はプラス，▼はマイナスを表す

***: $p<.001$, **: $p<.01$, *: $p<.05$, †: $p<.10$.

イ 調査Ⅱ 生徒へのアンケート2 UD化実施項目の評価と自己変化について

回収率は100%であった。集計結果について表6-1に示した。そのうち、⑥総合評価について、4群全体の相関と回答者数の割合を表6-2に示した。なお、表6-1に示した平均値は、群間における一元配置の分散分析の結果、全ての項目で進路希望、学年別による有意差はなかった。

表6-1 UD化に関する意識調査（実施項目の評価、自己変化の集計結果）の分散分析結果

質問	計 (n=99)		3年進学群 (n=15)		3年就職群 (n=21)		2年進学群 (n=33)		2年就職群 (n=30)		F値	
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)		
① 目標の明示	担当者の実施状況	4.77	(0.47)	4.93	(0.25)	4.86	(0.35)	4.73	(0.51)	4.67	(0.54)	1.44
	授業への必要性	4.61	(0.60)	4.67	(0.60)	4.76	(0.43)	4.64	(0.64)	4.43	(0.62)	1.38
	意欲の高まり	4.14	(0.80)	4.00	(0.73)	4.14	(0.83)	4.09	(0.79)	4.27	(0.81)	0.43
	知識・理解の深まり	4.10	(0.72)	4.13	(0.72)	4.19	(0.59)	4.06	(0.74)	4.07	(0.77)	0.17
	成績 上昇	3.72	(0.77)	3.80	(0.54)	3.62	(0.79)	3.79	(0.81)	3.67	(0.79)	0.30
	学習時間 増加	3.39	(0.68)	3.40	(0.61)	3.19	(0.79)	3.45	(0.61)	3.47	(0.67)	0.82
② 時間の構造化	担当者の実施状況	4.68	(0.55)	4.73	(0.44)	4.71	(0.55)	4.67	(0.59)	4.63	(0.55)	0.15
	授業への必要性	4.34	(0.71)	4.27	(0.68)	4.43	(0.66)	4.27	(0.79)	4.40	(0.66)	0.32
	意欲の高まり	3.79	(0.77)	3.73	(0.57)	3.90	(0.87)	3.61	(0.69)	3.93	(0.81)	1.15
	知識・理解の深まり	3.77	(0.75)	3.73	(0.57)	3.81	(0.91)	3.55	(0.66)	4.00	(0.73)	2.00
	成績 上昇	3.56	(0.73)	3.60	(0.49)	3.52	(0.73)	3.39	(0.69)	3.73	(0.81)	1.16
	学習時間 増加	3.40	(0.70)	3.47	(0.72)	3.43	(0.90)	3.27	(0.51)	3.50	(0.67)	0.62
③ 板書の規則化	担当者の実施状況	4.96	(0.20)	5.00	(0.00)	4.95	(0.21)	4.97	(0.17)	4.93	(0.25)	0.41
	授業への必要性	4.87	(0.37)	4.87	(0.50)	4.90	(0.29)	4.88	(0.33)	4.83	(0.37)	0.16
	意欲の高まり	4.10	(0.80)	4.40	(0.80)	4.14	(0.77)	3.88	(0.73)	4.17	(0.82)	1.66
	知識・理解の深まり	4.20	(0.68)	4.40	(0.80)	4.19	(0.50)	4.03	(0.63)	4.30	(0.74)	1.33
	成績 上昇	3.88	(0.74)	4.00	(0.73)	3.81	(0.59)	3.88	(0.81)	3.87	(0.76)	0.19
	学習時間 増加	3.47	(0.70)	3.80	(0.91)	3.33	(0.78)	3.39	(0.55)	3.50	(0.62)	1.53
④ 環境の整備	担当者の実施状況	4.71	(0.52)	4.60	(0.49)	4.76	(0.43)	4.73	(0.45)	4.70	(0.64)	0.30
	授業への必要性	4.43	(0.71)	4.47	(0.62)	4.67	(0.64)	4.30	(0.67)	4.40	(0.80)	1.14
	意欲の高まり	3.79	(0.84)	3.87	(0.72)	3.90	(1.02)	3.61	(0.74)	3.87	(0.85)	0.76
	知識・理解の深まり	3.71	(0.81)	3.80	(0.65)	3.90	(1.02)	3.52	(0.66)	3.73	(0.81)	1.11
	成績 上昇	3.52	(0.76)	3.60	(0.61)	3.52	(0.91)	3.39	(0.65)	3.60	(0.80)	0.46
	学習時間 増加	3.35	(0.70)	3.60	(0.80)	3.24	(0.75)	3.36	(0.59)	3.30	(0.69)	0.86
⑤ 協調学習	担当者の実施状況	4.74	(0.46)	4.80	(0.40)	4.67	(0.56)	4.79	(0.41)	4.70	(0.46)	0.44
	授業への必要性	4.40	(0.79)	4.27	(0.85)	4.33	(0.94)	4.55	(0.66)	4.37	(0.75)	0.57
	意欲の高まり	4.01	(0.81)	4.20	(0.83)	4.00	(0.82)	3.97	(0.72)	3.97	(0.87)	0.32
	知識・理解の深まり	4.11	(0.82)	4.20	(0.83)	4.14	(0.83)	4.15	(0.74)	4.00	(0.86)	0.27
	成績 上昇	3.81	(0.82)	3.87	(0.72)	3.95	(0.72)	3.88	(0.84)	3.60	(0.88)	0.95
	学習時間 増加	3.58	(0.78)	3.80	(0.91)	3.52	(0.85)	3.58	(0.65)	3.50	(0.76)	0.53
⑥ UDの総合評価	担当者の実施状況	4.68	(0.51)	4.67	(0.47)	4.67	(0.47)	4.70	(0.52)	4.67	(0.54)	0.02
	授業への必要性	4.48	(0.61)	4.47	(0.50)	4.52	(0.66)	4.48	(0.61)	4.47	(0.62)	0.04
	意欲の高まり	4.16	(0.75)	4.47	(0.72)	4.29	(0.70)	4.00	(0.70)	4.10	(0.79)	1.62
	知識・理解の深まり	4.03	(0.76)	4.40	(0.80)	4.14	(0.71)	3.94	(0.74)	3.87	(0.72)	2.01
	成績 上昇	3.85	(0.76)	4.00	(0.63)	3.86	(0.64)	3.82	(0.80)	3.80	(0.83)	0.25
	学習時間 増加	3.54	(0.73)	3.73	(0.85)	3.48	(0.73)	3.52	(0.66)	3.50	(0.72)	0.43

UDの必要性を感じている生徒は、興味関心、知識理解、成績の上昇に対する評価が高く、これらの項目は学習時間の増加との相関も見られた（表6-2）。

表6-2 UD化項目総合評価（相関と回答者数の割合、n=99）

	①実施状況	②必要性	③興味関心	④知識理解	⑤成績	⑥学習時間	評価5	評価4	評価3	評価2	評価1
							そう思う	まあそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない
①実施状況	-						69.7%	28.3%	2.0%	0.0%	0.0%
②必要性	0.66 ***	-					54.5%	39.4%	6.1%	0.0%	0.0%
③興味関心	0.26 **	0.69 ***	-				37.4%	41.4%	21.2%	0.0%	0.0%
④知識理解	0.35 ***	0.70 ***	0.84 ***	-			30.3%	42.4%	27.3%	0.0%	0.0%
⑤成績	0.22 *	0.63 ***	0.73 ***	0.79 ***	-		19.2%	49.5%	28.3%	3.0%	0.0%
⑥学習時間	0.28 **	0.45 ***	0.42 ***	0.45 ***	0.49 ***	-	13.1%	28.3%	57.6%	1.0%	0.0%

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05.

ウ 調査Ⅲ 成績の推移

5教科の成績を図1に、UD化した日本史Bの成績を図2に示した。H27年の5教科と日本史B及びH26年の5教科は、3年7月までの最高値以降は下降し、成績率の基準値（100%）を超えることはなかった。

H27年の日本史Bは、UD化直後は5教科の成績と同様に下降したが、その後2段階の成績上昇が認められ、最終回には基準値を上回った。

(6) 考察

調査Ⅰ，Ⅱより、UD化後の授業評価が全48項目中36項目で上昇もしくは維持し、UD化項目の評価でも、進路希望や学年に関係なく、生徒の学習に対する意欲や成績、学習時間が上昇したため、実施した手立ても有効であることが明らかになった。

UD化重点項目の総合評価における肯定的な回答（評価5，4）は、98%（97名）が担当者の実施状況を認識し、約94%（93名）が「わかる授業」に必要なとし、「興味関心」は約79%（78名）「知識理解」は約73%（72名）、成績も約69%（68名）が上昇したとしている。また、約41%（41名）に自主的な学習時間の増加が確認された。

調査Ⅲより、H27年の成績はUD化後、段階的に上昇したため、授業のUD化は、進学指導においても有効であった。具体的な全国偏差値は示していないが、H26年の5教科は全ての回で上回っていたものの、日本史Bは最終回（3年11月）に全国偏差値もH27年がH26年を上回った（差は4.1ポイント）。

以上のことから、成績についても効果が認められたが、UD化は即効性のあるものではなく、継続的に実施していくことによって、徐々に効果が表れると考えられる。

V 研究のまとめ

UD化によって、進路希望に関わらず学習に対する興味・関心、知識・理解など観点別評価項目の自己評価が上昇した。また、大学等進学希望者の成績が上昇したこと、その他の多くの生徒でも学習に対する意欲

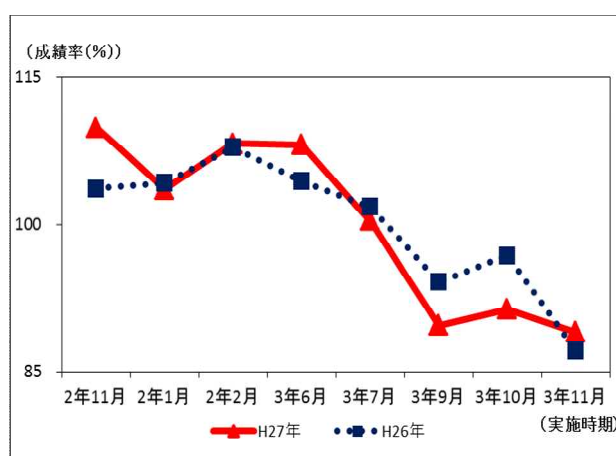


図1 5教科の模試結果の推移

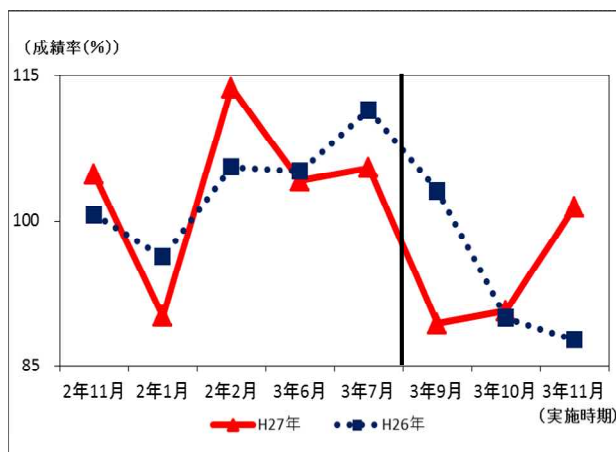


図2 日本史Bの模試結果の推移

が上昇したことから、UD化は、全日制高等学校における地理歴史科（日本史B）の学習指導において、学習意欲や学習理解に効果があることが明らかになった。

実施したUD化の手立て5項目の評価について、多くの生徒が「わかる授業」のために必要だとし、意欲や成績上昇とも関係が深かった。また、成績上昇がみとめられた進学希望者において、UD化後の授業評価やUD化項目の評価が特に高かった。加えて、雪田（2014）や外川（2015）が、定時制高等学校の数学科、国語科の授業において、UD化による有効性を示唆していることから、高等学校においてもUD化した授業は、障害の有無や進路希望に関わらず、確かな学力を育む「わかる授業」であると考えられる。

一方、教員への調査では、UD化を意識せずに「目標の明示」や「板書事項の規則化」を経験的に実践しながらも、UD化へ不安や抵抗を示す記述が見られた。村田（2014）は、UD化した授業の普及のためには知る機会とともに、支援・指導方法が効果的だと実感できるかという点が重要だとしているが、それを支持する結果であった。

生徒への調査では、わかる授業の要因として、「実物教材の提示」、「丁寧な言葉での説明」、「対話のある授業」など、以前から筆者が意識的に実践していたことも含まれており、成績や学習意欲の向上につながった要因は、必ずしも今回導入したUD化の手立て5項目のみではないとも考えられる。

したがって、個々の教員の経験から導き出された効果的な指導や配慮が、UD化の具体的な取組の要素であることを意識しながら、学校全体として無理のない範囲で授業のUD化を進めることによって、他教科での進学指導においても効果が表れるものと考えられる。

VI 本研究の課題

UD化の効果は実証できたものの、各学校の現状に応じて授業担当者が作題する定期考査でなく、大学進学希望者を対象とした模試を用いたため、対象数が極めて少なかった。また、成績は上昇したものの、下降傾向からの脱却にとどまり自己の最高値を超えることはなかったため、より効果的な手立ての選定が必要である。生徒の学習評価については、シラバス等に示す観点別評価規準にそって行うが、副次的に授業態度や課題等提出状況、資料活用の技術などが向上したため、当初の評価基準において、ほぼ全ての生徒が最高値での評価となった。以上の点を踏まえ今後の課題として、(1) 生徒数及び教員数を拡大しての検証、(2) より効果的なUD化の手立ての選定、(3) UD化に合わせた観点別評価規準の見直し、の三つを挙げ検証を継続するものである。

<引用文献・URL>

- 1 文部科学省 2012 「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm（2015.4.21）
- 2 文部科学省 2009 「高等学校における特別支援教育の推進について高等学校ワーキンググループ報告」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/054_2/gaiyou/1283724.htm（2015.4.21）
- 3 文部科学省 2013 「平成25年度特別支援教育体制整備状況調査結果について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1345091.htm（2015.4.21）
- 4 日野雅子・熊谷恵子 2014 「高等学校における発達障害のある生徒への配慮に関する調査研究」『LD研究第23巻第3号』, pp.257-271
- 5 吉利宗久 2014 「インクルーシブ教育に対する高等学校教員の自己効力感 —特別支援教育コーディネーターを対象とした質問紙調査の分析—」『岡山大学教師教育開発センター紀要第4号別冊』, pp.1-5
- 6 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2013 「特定の課題に関する調査（論理的な思考）調査結果」
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_ronri/pdf/10_tyousakekka.pdf（2015.10.20）
- 7 ベネッセ教育総合研究所 2013 「高校の指導の実態」『高校データブック 2013』
<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3180>（2015.9.20）
- 8 文部科学省 2015a 「平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果について」

- http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/09/1362012.htm (2015. 11. 30)
- 9 文部科学省 2015b 「平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における「いじめ」に関する調査等結果について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/10/1363297.htm (2015. 11. 30)
- 10 井上八城 2014 「授業に生かすカウンセリング技法」『平成26年度青森県高等学校教育研究会地理歴史科公民科部会研究紀要』 pp. 6-8
- 11 (株) ベネッセコーポレーション 2015 『2013年度～2015年度進研模試データ調査報告』
- 12 ベネッセ教育総合研究所 2015 「高校での学びや生活」『高校生活と進路に関する調査ダイジェスト版』
<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4766> (2015. 11. 30)
- 13 村田絵吏 2014 「高等学校におけるユニバーサルデザインに基づく授業づくり」『高知県教育委員会大学院派遣教員研究報告』
<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310101/hakennhoukoku.html> (2015. 8. 14)
- 14 雪田聡 2014 「定時制高等学校におけるユニバーサルデザインによるわかる授業の検討」『平成25年度青森県総合学校教育センター 長期研究講座報告』
- 15 外川知恵 2015 「定時制高等学校における生徒が「わかる」「できた」を実感できるためのユニバーサルデザインの視点に立った授業づくり」『平成26年度青森県総合学校教育センター 長期研究講座報告』

<参考文献・URL>

- 青森県総合学校教育センター 「今日からできる「わかる」授業～実は大切！こんなところ！！「授業のチェックポイント」～」
http://www.edu-c.pref.aomori.jp/?page_id=452
- 青山久美子, 川角博, 坂井英夫, 菅野晃, 鈴木孝, 塚越潤, 林正太, 宮城政昭, 岸谷正彦, 松尾直博
2010 「高等学校における「発達障害支援」の具体的な取り組み : 個々のニーズに即した支援」『東京学芸大学附属高等学校紀要』
- 阿部利彦 2015 『通常学級のユニバーサルデザインプランZero 2 (授業編)』, 東洋館出版社
- インクルーシブ授業研究会 2015 『インクルーシブ授業をつくる - 全ての子どもが豊かに学ぶ授業の方法 - 』, ミネルヴァ書房
- 川嶋直 2013 『KP法, シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション』, みくに出版
- 笹森洋樹 2012 「発達障害と情緒障害の関連と教育的支援に関する研究—二次障害の予防的対応を考えるために」『国立特別教育総合研究所専門研究B』
- 千葉県立船橋法典高等学校 2011 『高等学校における発達障害支援モデル事業報告書』
- 山形県教育センター 2013 『ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり』

<商標>

Excel は 米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標である。

<謝辞>

本研究において, (株) ベネッセコーポレーションはじめ, 協力いただいた皆様に深く感謝致します。